

大峰山と行者の道 ～ 摂田屋の地名は「接待屋」から

序

洋の東西を問わず、地名の成り立ちには、それぞれの場所の歴史が関係していることが多いと思います。

村松は、古くは村間津と書き、村々の間にある湊という地名から見られるように、信濃川流域の湊のひとつであり、栖吉とともに、中越の中心地のひとつでした。摂田屋の地名の由来として諸説ありますが、ここでは、7に示したように、支配地が細分化された「相給地」という慣習から、「接待屋」、「田屋」などの地名が各々の場所で使われていたと考えました。その上で下記の資料を参考に、

(*1) 長岡市編,「長岡市村松町の中世を歩く」,長岡市史双書No10 (1990)

(*2) 菊地章太,「十二山ノ神の信仰と祖霊観(下)」,東洋大学・福祉社会開発研究Vol3,(2010)

(*3) 小林芳郎,「しとのぎ荘摂田屋の考察」,長岡郷土史 第53号(2016)

大峰山や山古志方面を目指す修験僧や旅人の休息場所、宿としての「接待屋」にあるという説から説明を始めています。村松地域が、円融寺、大峰山から鋸山、山古志、小千谷の山岳修験道の入口であり、摂田屋が、その接待所、宿舎が集積する場所であったという説も、さもありなんと、納得いただけると思います。

1. 「接待屋」説について
 - (1) 歓喜寺の「接待屋」説とは (*3)
 - (2) 霊峰・金倉山
 - (3) 行者の道とは (*1)
2. 修験道の図

--- 以下、関連する話題を集めた ---
3. 円融寺記による円融寺の由来 (*1)
4. 円融寺の参考図
 - (1) 円融寺周辺図 (*1)
 - (2) 中世円融寺境内の復元図 (*1)
 - (3) 大峰山周辺図 (国土地理院地図)
5. 釜沢観音堂と満願寺
6. 鋸山、高彦根神社、栃尾の秋葉権現、栖吉の普済寺と奥の風谷山
7. 結論と相給地

詳細 並立の時代の詳細

「接待屋」と「摂田屋」は並立した

村松関連のできごと

13世紀	14世紀	15世紀	16世紀
紀伊の歓喜寺、古志の円融寺	村松・栖吉が中越の中心地で、金倉山周辺に修験の地	満願寺、円融寺大峰山の麓に宗教都市誕生	満願寺、円融寺上杉棄民一揆で突如崩壊

1. 「接待屋」説について

(1) 歓喜寺の「接待屋」説とは

「紀伊国和佐庄歓喜寺文書」(かんきじ、かんぎじ)という、和歌山県有田郡の歓喜寺に残る文書があって、それによると、ここの古志の国しと脱(しとぬき)荘・摂田屋も、この和歌山県有田郡の歓喜寺の所領だった。 歓喜寺は、各地に大きな所領を持つ大寺だった。

そして有田郡の領内の寺・薬徳寺では、熊野参詣の僧や尼のための「接待屋」を経営しておった経験から、古志の自領のしと脱(しとぬき)荘にも修験僧の往来が多かった為、この古志の地にも「接待屋」を設けた。これが、摂田屋という地名になった、という説です。

以上が、小林芳郎氏が長岡郷土史 第53号(2016)に書かれた、「しとのぎ荘摂田屋の考察」の中の、歓喜寺の「接待屋」のあらましです。

ネットで調べると、聖聚来迎山歓喜寺(かんぎじ)は、和歌山県有田郡有田川町にある浄土宗の寺院で、本尊は阿弥陀如来。「歓喜寺」は所在地の地名にもなっている。宝物殿には伝明恵上人坐像や明恵所用と伝わる礼盤など国指定の重要文化財がある、といえます。

歓喜寺は、宝治2年(1248)頃僧恵鏡が京都に開創した蓮光寺に由来するといわれ、のちに歓喜寺と改称されました。正平7年(1352)頃歓喜寺の名称とともに和佐庄内薬徳寺に引継がれ現在に到っています。中世史料のほとんどない紀ノ川下流域の中世史を構成する上で不可欠な資料となっています。特に嘉暦2年(1327)の和与(訴訟における和解)関係の文書や熊野参詣者の接待に関する文書は異色の資料といえます。時代的には13世紀後半から17世紀前半にかけてのものです。和歌山市禰宜91にも、歓喜寺があつたが、和佐庄歓喜寺に吸収されたという記録もあり、中世の有力寺院であったようです。

その「接待屋」が接待するお客が、次に(2)に示すように、修験僧です。修験道の熊野には大峰山という名の修行の地がありました。

既に金倉山を中心とした修験の山中があり、修験者も多く訪れていたと思われます。それに気づかれた歓喜寺サイドが、自領の熊野にある大峰山に類似した山として、この長岡・村松の山に、大峰山と名づけ、その山からの修験道道場ルートを作ったと考えるのが妥当ではないかと私は思っています。

並立の時代の詳細は、7章を参照。

(2) 霊峰・金倉山

1) 登ってみると

金倉山は小千谷と山古志の境となる標高581mの山で、虫亀からは山頂の付近まで軽トラも通れる登山道で、頂上には展望台があります。

登山道のいたるところで、山古志の山村風景が一望でき、とくに棚田・棚池が続く風景は絶景です。

昭和45年以来、全国的に減反政策が浸透するなか、旧山古志村では水田を養鰻池に転換する方策がとられ、転作がうまくいったほうではないかと、言われています。

水面に空が写る棚田なら春先と稲刈り後だけですが、ここは棚池が多いことから通年で、美しい棚田風景が見られ、また谷が深いことから霧も頻繁に湧く、本当に希有で素晴らしい場所です。



登山道からの魚沼三山

2) 眺めてみると

長岡の中心部から見る金倉山は、東山連峰の南の端の山にすぎませんが、信濃川の対岸の越路のほうから眺めた金倉山は、すそ野も誠に広く雄大な山で、周囲を圧倒する山塊です。ここより南側は標高の高い山はなく、小出まで低山地が続きます。北に連なる東山連峰と繋がっているように感じられますが、独立しているようにも見えます。

よく見ると、東山連峰は北西に面していますが、金倉山は山容がほぼ西面しています。

つまり、同一の褶曲造山運動ではないことが予想されます。実際地質学的には、北に連なる東山連峰とは別の成因であるとされています。



大峰山山頂付近からの金倉山

3) 神々の山

古くは神名倉(かなくら)山とも書かれ、各峯に神が祀られているとのことで、南の幡持(はたもち)山に四道(しどう)将軍の大彦命(おおひのみこと)、中の峯の幕(まく)山に天日桦命(あまのひほこのみこと)、北の峯の美明(みあけ)山に波多武日子命(はたたけひこのみこと)と天美明命(あめのみあけのみこと)の夫婦神が祀られているとされています。ちかくには御所平(ごしょだいら)、鎮(しず)め滝、神つんね(峯のこと)、供御水(くごすい)などとよばれる場所があり、神々とかかわりのあった山であることが伺われます。

中世には寺院もあって、おおいに賑わったというが、享禄年間(五章参照)の戦線で美明山にあった神社、寺院も破壊されたといわれています。

麓の妙見、六日町の三宅神社は、この金倉山の神を勧請したものと、三宅神社に伝わっています。これらの神社が、平安前期の作とされる延喜式神名帳にあることから、いかに神名倉山が古くから知られていたかが、わかります。(神々の山については、長岡歴史事典) 下図は、

妙見三宅神社
で拝見した、
三宅神社の
由来を説明する
神名倉山絵図
です。



六日市(大久保が岡)、中潟、妙見の、三つの三宅神社が、継承しているということで、三宅の名称が、大和朝廷の直轄領である屯倉(みやけ)に由来すると考えられることから、金倉山を含め、このあたり一帯が、大和地方と密接な関係に降ったことが想像されます。

下の写真は、大峰山山頂付近からの眺望で、右が金倉山、左が猿倉岳、猿倉岳の更に左(北)に鋸山が続き、修験の北ルートを遠望できる場所です。「行者の道」の章で、金倉山が、「行者の道」の結節点であることを説明しま

すが、大峰山から金倉山を眺めると、その入り口として大峰山が好位置にあることを実感できます。



(3) 行者の道とは

円融寺は、金倉山・虫亀の隣の山、竹之高地を水源とする太田川(信濃川支流)が平野部へと流れ出る村松の地にあり、かつては大峰山の山裾に広大な寺領を持っていたお寺です。730年開基、千三百年の歴史をもつお寺で、今も残る小字名には、天狗・南羽黒など、修験の場を想起させる地名が多くあり、円融寺の周辺が修験(的な信仰)の場を形成していたことをうかがい知ることができます。

今は近世創建の勝覚寺、本覚寺、洞照寺が周囲にあります。当時は、周囲一帯が円融寺の寺領だったそうで、近くの石坂という地名も、円融寺の石段からきているという説もあり、正に、この村松の地の中心でした。

『山古志村史』には、山古志をとりまく形で、いくつかの「行者の道」が想像される記述があります。山古志村の東北部に位置する金倉山を中心にして三方に通が形成され、一つは山古志の南側にかかる道で、小千谷の八海山ー薬師山ー雨乞山ー大日山、(小千谷)八海山ー若宮山ー金倉山という二つのAルート。さらに浦柄の北、白岩(しらいわ)ー石坂山ー星ヶ峠ー金倉山というBルート。そして金倉山から北へ続く萱峠ー花立峠ー鋸山ー八方台というCルートです。金倉山が中心にあることが、理解できます。魚沼の八海山は、役行者小角、そして弘法大師が頂上で蜜法修行したとされ、八海山尊神社境内で今も行われる奇祭・大火渡祭の荒行で知られる、越後の山岳信仰の聖地ですが、この小千谷・八海山は、魚沼八海山を模した霊山として扱われていたようです。

ルートについては 2章 修験道の図 に図示しました。

これらは山古志とそれをとりまく周辺とを結ぶ最も古い「山の峰づたい」の交通路としてとらえることができます。金倉山に至る山古志には、十二神社という、「山の神」を祭る社が多数散在し、十二神社は撰田屋にもあります。そして、その交通の中心のひとつが竹之高地であり、不動社が祀られたのではないかと、というのが、私・春日の仮説です。

中世、上杉謙信の時代には、村松に円融寺、その下手の釜沢には満願寺という、ともに七堂伽藍を備えた大きな寺が、境内を接するように建造されていました。まさに、熊野に匹敵する、中世宗教都市の誕生です。

(*長岡の史料「上組史料雑考」(昭和12年刊行) p108 ～ 牧野侯(通り)の文字)

撰田屋は、これらの大寺への訪問者、修験僧、そして旅人のための接待屋として、戦国時代の終わりまで、上杉氏の繁栄とともに栄え、そして突如、上杉氏の会津配置替えと上杉遺民一揆により終焉を迎えます。長岡勢は、御館の乱、上杉遺民一揆と、続けて敗者側に肩入れし、更に三世紀の後、またまた敗者側に肩入れするのですから、アゼンとします。その上、信濃川という暴れ川と豪雪に苦しんできた越後長岡、何ともやりきれない気持ちになります。でも、そこから甦るのも長岡です。

長岡の郷土史史料「上組史料雑考」(昭和12年刊行) p108

初版昭和12、復刊平成15上組小学校・同後援会発行

山岳交通 大峰山の峰伝い交通路

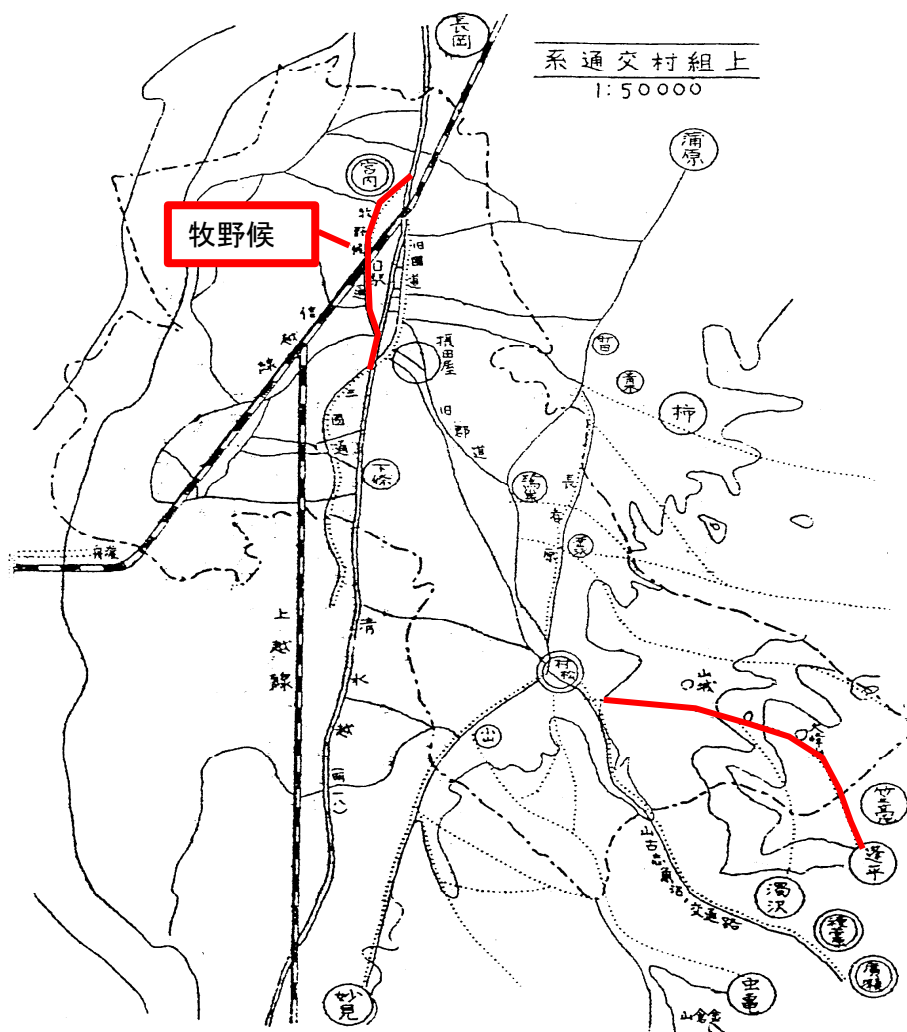
釜沢より蓬平、竹の高地

長者が原の横断連路

村松、夕日長者が原、釜沢・鷺の巣～青木山

参勤交代道路

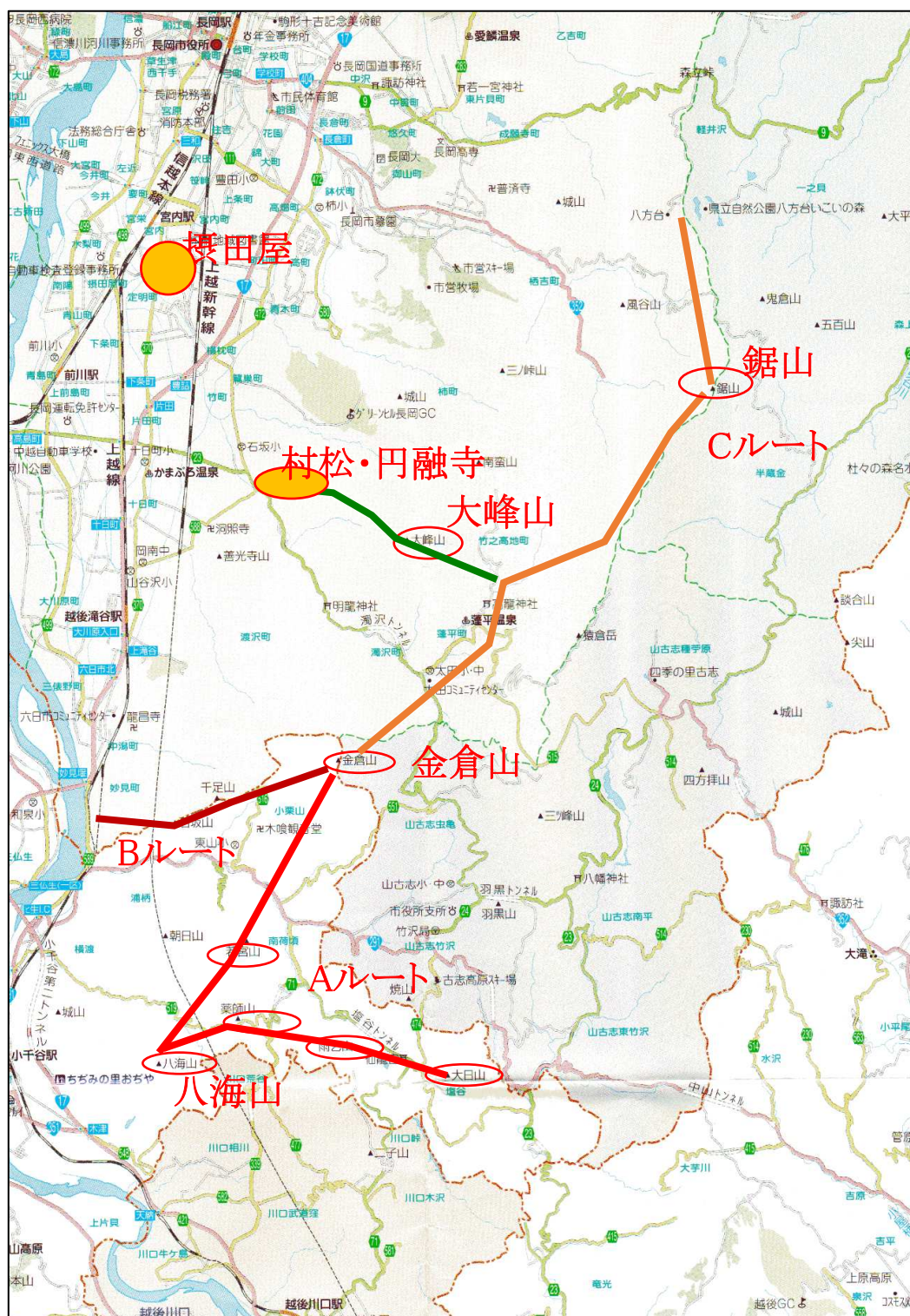
長岡より現国道西を通って定明



この「上組村交通系」は、牧野候(通り)、大峰山の峰伝い交通路、長者が原の横断連路と、大変多くの道路情報を含む図です。

2. 修験道の図

村松・円融寺から大峰山、修験道の道



3. 円融寺記による円融寺の由来

(1) 円融寺縁起

天正年間(729-749)に行基が遊行の途中に立ち寄り、医王山を開山。
天平神護二年(766)に快道律師により寺を建立、円融寺と号す。

貞元年間(976-978)には円融天皇の勅願所になった。

永正四年(1507)の越後国内の乱、慶長五年(1600)の越後遺民一揆の
二度、寺は焼かれた。 永正の乱(えいしょうのらん)

上杉の会津移封には、円融寺の住職も同道。

永正の乱の後、僧鏡伝が再建。鏡伝の作による薬師如来像、十二神将像
が現存。 十二神将像は郷土史料館に展示。

善光寺信仰もさかんであつたようで、阿弥陀如来像も伝わる。

<http://kojyosikyo.main.jp/Nagaoka-C/Muramatu-Jo/Muramatu-Jo.htm>

《由緒沿革》

『天平の昔(729～)古志郡岩井谷に開創、越後三谷の霊場の一つに
数えられた。当初天台宗で、貞元年中(976～77)円融天皇の勅願
所となり、菊花御紋章を許され法幢大いに栄えたという。文明十九
年(1487)検地帳によれば、寺領二万一千刈(約二十六町歩)とある。

永正四年(1507)上杉長尾の兵乱の際、堂塔炎上したが、薩摩国
鏡伝比丘善光寺如来の霊夢により再興、次いで慶長三年(1598)
上杉景勝の会津移封に住僧随伴したが、翌年遺民一揆の攪乱で
寺坊が又々焼失し退転した。

元和二年(1616)高野山宝亀院末格院となり、
宝暦十三年(1763)除地十二石、長岡藩主牧野侯の崇敬を受ける。
代々有徳の師輩出し、
四十一代宥寛の弟子弘基は本山智積院三十世僧正に進んだ。
明治四十三年(1910)京都智積院末となり、法燈連綿千二百有余年に
及んでいる。』

「新潟県寺院名鑑」より

※ 越後三谷の霊場

蓮花谷の五智院、逆谷の寛益寺、村松の円融寺

(2) その他特徴 ～ 「長岡市村松町の中世を歩く」他より、抜粋
 長岡市村松町、真言宗円融寺の裏山に、南北朝時代に
 新田義宗・義興兄弟が拠った村松城がある。

東山丘陵の主峰・大峰山から西方に派生した尾根上にあり、
 北側に羽黒山城がある。村松城の縄張りは羽黒山城と酷似しており、
 制約された痩せ尾根を巧みに利用して、郭や堀切、畝形阻塞など
 均整のとれた縄張りをもっている。主郭の上部に三条の連続堀切、
 五条の畝形阻塞があり、畝形阻塞の底に石で囲まれた井戸跡がある。
 居館は旧・円融寺のあった小字「岩谷」にあったとされているが、
 その性格な位置は確認されていない。

----- 中世 長岡 -----

永仁元(1293)

時衆の他阿真教が蔵王堂で多くの人々を教化する
 石内の極楽寺が開かれた、と伝える

建武元(1334)

このころ、円融寺に阿弥陀如来像を納めたと伝える

永正4(1507)

永正の乱が始まり、村松の円融寺が焼失する

永正7(1510)

このころ、関東管領の上杉顕定が越後へ攻め込み、
 長尾為景方とはげしく戦う

長尾房景は為景に味方し、蔵王堂で上杉顕定らと戦う

大積保が、長尾為景から上杉家の代官神余昌綱に与えられる

(3) 永正の乱の概要

永正の乱とは、永正年間に関東・北陸地方で発生した一連の戦乱で管領家の内紛や古河公方の内紛なども含む。

当時関東管領を務めていた上杉顕定が急死に伴い、越後守護・上杉定実、守護代・長尾為景（景虎(謙信)の父）の体制による統治となったが、事実上は、国政の殆どを為景が仕切る事になる。

その状況に、定実が、徐々に不満を募らせたらしく、両者に争いが生じ、永正十一年(1514年)上田庄(うえだしょう＝南魚沼市)の戦いで、為景方の長尾房長らが勝利した。

この勝利により、長きに渡った守護VS守護代の戦いは終了し、以降は、守護＝定実が存在するものの、現実には為景が越後の国政の実権を握って采配を振る事になる。

天文12(1543)

為景の子景虎(謙信)が栃尾城に入り、古志長尾家を継ぐ

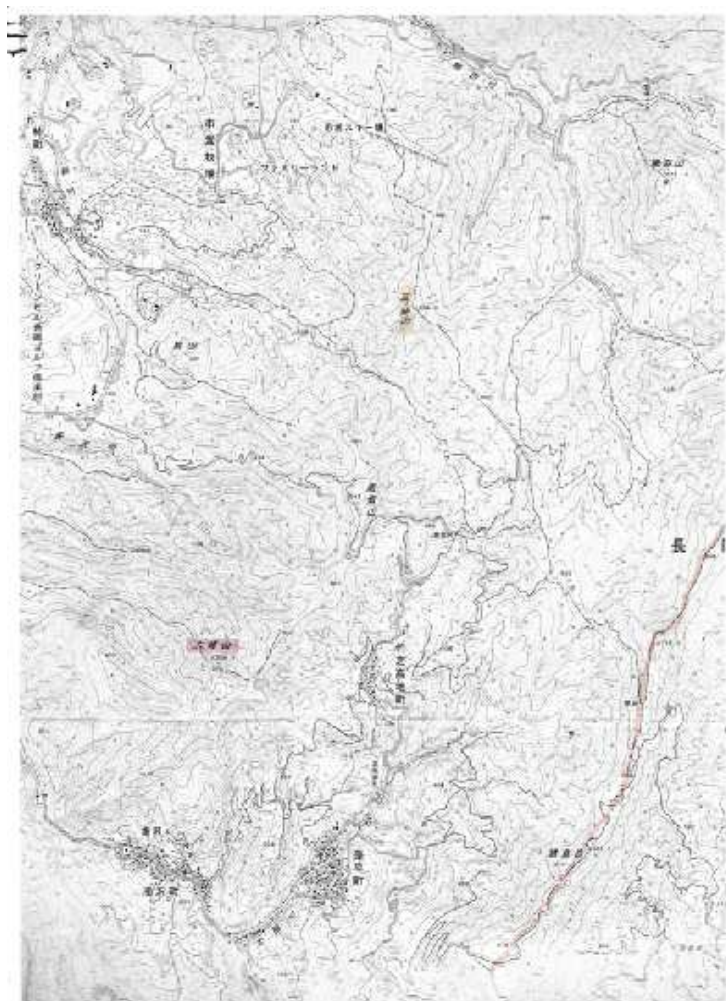
天文17(1548)

長尾晴景が景虎(謙信)に家督を譲る。

(4) そのころの牧野氏

ちなみに後に長岡に入府する牧野氏は、永正の時代、三河・牛久保で台頭する。享禄の時代の次の天文元年(1532)。牧野氏は家康の祖父・清康と戦い、敗れる。徳川への帰参は更に20年近く後の永禄9年(1566)で、正式に家康から牛久保城主と認められる。

(3) 大峰山周辺図



5. 釜沢観音堂と満願寺

村松のお寺の歴史のなかで、かつて満願寺という、大きなお寺がありました。

(1) 満願寺の宝物とされる事物

釜沢にあった満願寺は8世紀に創建の大きな寺であったが、16世紀前半の永正の乱で焼失、再興するも1600年の上杉遺民一揆で再び堂宇を焼失、廃寺となった。山林修行から民間布教に転じた奈良時代の高僧で、奈良の東大寺大仏建立の

勧進役として知られる行基が開創したと伝えられる。



かつて満願寺の本尊であったとされる 千手観音座像。

平安後期の作 像高 56.5cm (行基の作と伝えられている。) 60年に一回のご開帳で、次回は2057年とされる。

その代わりの前立仏は、板絵の千手観音菩薩像で、永正17年(1520)、満願寺の本尊を描くとの墨書きが裏面に残り、永正の乱との関わりが想像される。

写真は「長岡の文化財」 平成26年 長岡市教育委員会編より

下記記事(長岡市市政だより 昭和44年11月号)にある、釜沢観音堂の鰐口も、かつての満願寺の什物とされています

文化財 (8)

●釜沢観音堂の鰐口
刻名に、応永二十四年(二四一七)七月、越後国古志造殿庄(いまの村松町から六日市町あたり一帯はこう呼ばれていた)下条蒲沢山鰐口大工家吉の銘遣……とあるこの鰐口は、その昔、鎌倉官領上杉憲朝の息、上杉定正の館跡といわれる鷺巣町の定正院から東へ一・五キロメートル、林道南蛮(ばん)線に通ずる釜沢町の釜沢観音堂にあります。青銅づくりで直径は約四十六センチメートル、県下各地の鰐口のなかでもこの時代の作品はめずらしいといわれており、五百五十有余年たつたいまもなお、なんともいえない響きを聞かせてくれます。

昭和三十六年二月、市の文化財(工芸品)に指定されています。

●円融寺と十二神将
蓮花谷の五智院、逆谷の寛益寺とともに、越後三谷の霊場といわれた岩井谷(村松町)の円融寺は、大同二年(八〇六)行基菩薩(はさつ)が開山したといわれています。円融天皇の勅願所とも、勅許によって建立されたともいわれるこの寺は、文明(一四七〇)のころには鎮守四社、塔頭十四坊という大伽藍(がらん)で絶対の権勢を誇っていました。

また、同寺三十一世住職鏡伝が大永六年(一五二六)につくった十二神将は、白座までの一本づくりで、高さそれぞれ二・七センチ、四百五十年近い年輪を重ねたその姿は、うにいれない趣きがあります。なお、この十二神将は郷土史料館に展示してあります。

●御山焼瓶(一対)
天保十四年(一八四三)長岡藩十代藩主牧野忠雄が、京都清水坂の二代目清水六兵衛を招き、悠久山内にかま場をつくって焼かせたということから御山焼といわれています。蕎麦神社にあるこの瓶(へい)は昭和二十九年二月、市の文化財(工芸品)に指定されています。





(2) 中世の長岡と村松

年代	記事
永仁元(1293)	時衆の他阿真教が蔵王堂で多くの人々を教化する 石内の極楽寺が開かれた、と伝える
嘉元4(1306)	後宇多上皇が白鳥荘を昭慶門院に譲る
建武元(1334)	このころ、円融寺に阿弥陀如来像を納めたと伝える
4(1337)	足利尊氏が紙屋荘を九州の大友氏に与える
正平7・ 文和元(1352)	蔵王堂で、尊氏方の石坂氏らが南朝方の風間越後守と戦う
4(1355)	中条氏が蔵王堂に本陣を構え、宗良親王・脇屋義治らが守護宇都宮氏綱とともに志度野岐荘の於木野島・大島荘平方原で戦う
正平20(1365)	南朝方の芹川城主大島讃岐守頼興が減びた、と伝える
永和4～応永13 (1378～1406)	大積四か村の年貢が、守護上杉房方から京都北野神社に寄附される
応永24(1417)	釜沢の満願寺に、金銅製髭口が寄附される

長岡市ホームページ、
「長岡の中世」年表より

中世における、村松関連のできごと			
13世紀 紀伊の歓喜寺、 古志の円融寺	14世紀 村松・栖吉が中越の 中心地で、金倉山 周辺に修験の地	15世紀 満願寺、円融寺 大峰山の麓に 宗教都市誕生	16世紀初頭、永正の乱で 満願寺、円融寺が焼失。後に 再興するも、上杉棄民一揆で 満願時は消滅した。

(3) 永正の乱(えいしょうのらん)と、円融寺、満願寺

戦国時代初期の永正年間(1504-1521)に関東・北陸地方で発生した一連の戦乱をいう。「永正の乱」は、いくつかの戦いの集まりであり、ここでは越後に関するものに限定する。越後内乱の発端である長尾為景の謀叛、上杉顕定の戦死が山内上杉家の内紛の端緒となり、越後から関東全域を巻き込んだ。

永正3年(1506年)越後国の内乱で、関東管領上杉顕定が死亡し、山内上杉家の軍事力は大きく減退。その後も永正9年(1512年)まで、山内上杉家の内紛、古河公方家の内紛が続いた。

上杉憲政は、山内上杉家15代当主。北条氏康に敗北した後、長尾家の長尾景虎(のちの上杉謙信)を養子とし、越後の内乱終結後に、上杉謙信の実父である長尾為景が国内をまとめた。

その後の享禄4年(1531)に上杉憲政が関東領を継ぎ、内乱が終結。

その永正の乱のころ、村松では、円融寺とともに、満願寺も焼失。

のち謙信が満願寺に帰依し、七堂伽藍を揃えたという。

(4) 上杉遺民一揆（越後遺民一揆）

慶長5年(1600年)関ヶ原の戦いに関連し、越後国で、主に堀氏(東軍)と、上杉景勝(西軍)の軍および影響下の越後残留勢力との戦闘があった。その前年の1599年、豊臣秀吉の死後、政情不安な状態の中、五大老のひとり上杉景勝は伏見から領国会津へ帰国。家老の直江兼続に命じて新規に築城したり、砦や道を修復し、峠を要塞化した。また武器、米を買い、浪人を多数雇った。隣国であり、上杉氏の旧領の越後の領主となった堀秀治は転封後、即座に検地を行ない、作物に従前以上の年貢をかけ、また上杉時代は無税であった商品作物にも課税した。これを怒った、越後にとどめおかれた旧上杉方の国人領主や地侍、農民が堀氏の居城春日山城に大挙して押し掛け、決起する事件も発生していた。これを機とみた直江兼続は、身分の低い兵のうち、智謀に富み忠義のある者を選び浪人を装わせて潜入させ、寺社などにも声をかけて一揆を起こさせたという。しかし、徳川軍により、鎮圧された。

上杉遺民一揆の際、満願寺は堂宇を焼失したが、その宝物の千手観音、前立板絵十一面観音などが観音堂に安置されている。

村松は、これら大寺への訪問者、修験僧、旅人の往来で戦国時代の終わりまで賑わい、上杉氏の繁栄とともに栄えたが、上杉氏の会津配置替えと上杉遺民一揆により、突如、宗教都市の終焉を迎えた。

[参考] 関東管領と守護職の上杉氏

尊氏が幕府を開いた際に、鎌倉に嫡子を置き、1336-1337の間、斯波家長を補佐においたのが関東管領の始まりと言われる。

途中からは地元に影響力のあった上杉家が代々受け継いだ。

二代、四代、・・・の関東管領が上杉憲顕(1306-1368)で、

(1338, 1340-1351, 1363, 1366-1368)の長期間。実質的に初代関東管領。

鎌倉時代末から南北朝時代を生きた、山内上杉家の始祖である。

憲顕の父方の叔母は、足利尊氏の母清子であり、足利尊氏・直義兄弟とは従兄弟の関係にあった。

憲顕の死後、息子のうち、関東管領は朝房と能憲が就任、憲栄は越後上杉家の祖となり、能憲は宅間上杉家、憲方は山内上杉家を相続した。

その時の足利将軍は三代の足利義満という時代である。

憲顕の時代の約200年後、山内上杉家15代当主・憲政は北条氏康に敗北し、長尾家の長尾景虎(のちの上杉謙信)を養子として上杉家の家督を譲った。越後の内乱終結後、上杉謙信の実父である長尾為景が国内をまとめ、謙信の時代へと続くことになる。

6. 鋸山、高彦根神社、栃尾の秋葉権現、栖吉の普済寺と奥の風谷山

(1) 鋸山

登ったことはあるのに見落としている人も多いと思いますが、山頂近くに「湯殿山霊社」があるそうです。これは出羽三山の信仰の中心の湯殿山を祀ったものです。この祠自体は明治に作られたそうですが、鋸山が、以前から修験道の行者の修行の場だったといえるかも知れません。

(長岡市立科学博物館 ガイドブック東山-自然と歴史-)

(2) 高彦根神社

明治に改称する前の都野神社は、別名、一王子神社とも呼ばれていたそうです。(長岡歴史事典) 神仏習合の時代には、一王子は熊野権現を祀ったものですので、いつのころか、熊野権現が合祀されたため、このように呼ばれることもあったと思われます。

ただ、摂田屋の町とは少し距離がありますので、個人的には、摂田屋の地名の「接待屋」説と関連付けるには、少し無理があるのではないかと感じています。

(3) 蔵王神社の前身、栃尾の秋葉権現

鋸山の更に北に栃尾の山々があります。栃尾の権現と云えば、秋葉信仰です。

栃尾の秋葉権現は、栃尾蔵王権現とも呼ばれているようですが、蔵王権現は、やはり修験道一派ですので、これまた修験道の聖地でありました。たまたま寺泊を経て蔵王堂に移された時期がありましたので、修験の道の花立峠－鋸山－八方台というCルートの北への延長が、途絶えてしまったのかも知れません。(その後の維新後の廃仏毀釈により、栃尾秋葉神社も修験とは切り離されたものと云えます。)

(4) 栖吉の普済寺と、奥の風谷山

風谷山は、天平年間に、加賀の白山を開いたとされる安泰澄が、ここに薬師如来を作って安置したといい伝えられています。また麓の栖吉・普済寺は、中世には巨大寺院で修験との関わりもあったようである。

このように、長岡には修験道が古くから集まっていたと思われます。その流れの上に、円融寺---大峰山かあったという考えも、あながち無理でないのでは、とも思っています。

7. 結論と相給地

20190718 春日

改訂20201216

(1) 結論までの今までの経緯

紀州にもとのある、古くからの修験者の道場と接待所、水につかりやすい田圃の田屋の摂田屋の二説をもとに、いろいろ想像していたなかで、昨年2019年7月、相給地(*1 あいきゅうち)という言葉を知り、村の呼び方として、「接待屋」と「摂田屋」は並立した、という仮説に到達しました。ところが、今秋2020年の9月に長岡市立中央図書館文書資料室より、市民向け古文書学習講座の過去の参加者宛に、古文書講座テキストのバックナンバー販売の文書が送られました。しばらく開封したままにしていたのですが、書類整理をしているときに、改めて読み返したところ、平成19年度の講座テキストの中に、安禅寺文書の中の『接待屋』と『摂田屋』の出入り という文書をもとにした学習があったことがわかりました。早速、文書資料室に出かけ、該当部分をコピーさせていただきまして、二つの村名が確かに並立していたことが、わかりました。

その文書は、接待屋村と摂田屋村の庄屋を兼務させてほしいという、安政六年(1859)、接待屋村の庄屋から安禅寺の役所に届け出た文書でして、このことから、次のことが分かります。つまり、接待屋村と摂田屋村という名の別々の二つの村があり、接待屋村は安善寺の管理下、摂田屋村は長岡藩の管理下にあったということです。

遠方にある所領が相給地となっている何人かの旗本が、そのうちの一人に年貢取り立ての管理を委ねることは、普通に行われていたようです。これと同じようなことを、この接待屋村と摂田屋村の庄屋でも行おうとしたのが、この申し出のようです。

(2) 相給地

この「相給地」という支配形態は珍しくなかったようです。一つの村を旗本の五家で細分し、この「相給地」を代表の旗本に年貢などの管理を委託することは常態化していたそうです。

※ 相給地(あいきゅうち) Wikiより

江戸時代、1村が2人以上の地頭または領主によって領知されること、またはその知行地。1村が分割領有されるので分郷(ぶんごう)ともいう。

江戸時代の知行割は村高を基準に1村単位で給与されるのを原則としたが、相給方式をとることがしばしば行われ、江戸時代知行制の一特色となっている。区分けの方法は、村を東西や南北などの地理的条件により一律に区切るということはせずに、各田畑の良し悪しなどを考慮して個別に帰属が決定された。したがって相給の村内ではモザイク状に領地が形成された。

江戸期に、摂田屋が長岡藩領、蔵王神社社領が、明解な境界線で区切られているのではなく、モザイク状に領地が細分化されていたらしいということは、長岡造形大の平山育夫先生の研究調査の講演をお聞きし、知っていました。これが「相給地」というものだったということです。

(3) 摂田屋の場合

しかし、ここ摂田屋のように、藩領と寺社領が細分化となると、いずれかに任せるといふわけにもいかないと思います。

すると、支配者としては、いずれかの立場に沿った地名を使うのは、やりにくく、むしろ別々のほうが合理的です。そこで、書類上の名称なり地名の呼び名を変えたほうがいいということになりますが、せめて書類上で区別できるなら、呼び名は同じ方がいい、と考えた人もいると思います。

では、どうするか、改めて考えますと、接待屋村と摂田屋村などとするのが、妥当であると思うのです。

つまり、長岡藩領の人々は田屋という地形から「摂田屋」と呼び、蔵王神社社領の人々は修験行者の町ということで「接待屋」と呼んでいたとしても、何の不思議もないのでは、と思ったのです。

長岡の地元の郷土史史料である、「上組史料雑考」(昭和12年刊行)にも、1800年代の前半、長岡藩領では田屋、「摂田屋」と呼ばれていたが、蔵王代官が「接待屋」という呼称にするよう領内に命じたとの記述があります。今回の、接待屋村の庄屋から安禅寺の役所に届け出た文書は、まさに、二つの名称を使い分けていたことを示しているものです。

「摂田屋」、「接待屋」のどちらが本当か、いつまでも決着がつかなかったのは当然でして、「両方とも同時期に使われており、両方とも本当」なのです。

結論 「接待屋」と「摂田屋」は並立した村名である。

すっきりしました。

次に、詳細を「並立の時代の詳細」として 追記しました。

詳細 村名「接待屋_摂待屋」と「摂田屋」の並立の時代について

1. 書類の意図

「摂待屋」と「摂田屋」は並立した

長岡藩領の「摂田屋村」

安禅寺領の「摂待屋村」

摂待屋村の村役が、長岡藩の役所に提出した、村役の兼務願い書である。

接待屋村と摂田屋村の庄屋を兼務させてほしいという、
安政六年(1859)、接待屋村の庄屋から安禅寺の役所に届け出た文書。

2. 安政六年 1859 は、どんな時代だったか

1853年(嘉永6年)	～黒船来航
1854年(安政元年)	
1855年(安政2年)	～安政江戸地震
1858年(安政5年)	～安政の大獄
1859年(安政6年)	長岡藩領の「摂田屋村」 安禅寺領の「摂待屋村」
1861年(万延元年)	～桜田門外の変
1862年(文久元年)	～生麦事件
1862年(文久2年)	～生麦事件
1863年(文久3年)	～薩英戦争
1867年(慶応3年)	～大政奉還

3. 摂 の字

①とる。取り入れる。「摂取」「包摂」	接心／摂心 セっ-しんの説明
②かねる。代わって行う。「摂政」	1 心が外界の事物に触れて感ずること。
③ととのえる。おさめる。やしなう。 「摂理」「摂生」	2 仏語。 ⑦精神を集中し、乱さないこと。
④「摂津(せつつ)の国」の略。「摂州」	⑧禅門で一定の期間、座禅をすること。

4. 何のお客、旅人を接待

誰も言っていないようですが、私は、当初は、大峰山や金倉山への修験者、そして中世には大峰山の麓にあった、満願寺、円融寺という七堂伽藍を備えた大寺院の参詣者ではないかと思うのです。云われている都野神社参詣者説は、摂田屋に遠いため、無理があるように感じます。

みな、16世紀に上杉棄民一揆で崩壊しましたので、一切が不明ですが。

村名「摂待屋」と「摂田屋」の並立の時代 安政六年
「摂待屋」と「摂田屋」は並立した村名

乍恐以書付奉願上候 (読み下し文略)

藩村役録之儀、前々私所持仕来候処、進退不如意ニ罷成、先年願上堀金村庄屋専左護門方江質地ニ差向、當節年明之所、金子調達出来兼、無余儀今般流地之図リニ對談仕候得共、當村

方之儀者、御案内被為下置候通り、**長岡御領摂田屋村**組田畑家立共、悉入交り内実一村同様之村柄ニ候処、畢竟御双方御役儀共、從來私方ニ而相勤候故、是迄無事ニ相治候儀ニ付、後年ニ至り万一村役場引分連、両庄屋等ニ相成候而者、未々両村共必至与立行兼候次第、百姓一同心痛仕、右之訳柄申入、双方熟談之上、御役儀者是迄之通り達次方ニ而、永々相勤候究、且後年ニ専左護門方不差操ニ而、右役録手放し候節者、時之相場を以、達次○村方江讓返し呉候図り、役諾規定書今日為取交之候間、何卒以格別之御慈悲、此段宜御聞濟被成下置度、別紙差上候役録之儀者、右専左衛門江被仰付被下置度、奉願上候、以上

安政六未年二月

長岡御領摂田屋村

右願人

摂田屋村

組頭達 次印

惣 左衛門 印

々 甚 右衛門 印

御役所

奉差上書付之事

摂待屋村

一 村絵図面 式枚